

次もまたお寺、しかもやはりガンジス河に臨んでいる。これはラマ教の寺で境内は広々として清潔を極め、物乞い、浮浪者のようなものは全然ない静かな境域、寺は白亜の美しい構造、陽のふりそそぐ河べりで何人かの男女が水浴をしている。向こう岸には工場のようなものが見える。同行の日本画家のひとり、よほどこの景観が気に入ったらしくせつせと堂の扉の彫刻などをスケッチしていた。宗教の違いによるものとは思いますが、この清らかな寺院は心の安まる思いであった。が、ただわれわれのためについてきている案内人は、あまりにも案内でこれがどんな由来を持つ寺院なのか、黙して語らないといった風で、たちまち車馬のあふれいる英国風都市の方へつれ戻し、ホテルへ牛の餌を求めに帰ることになった。

三

カルカッタは、さすがに英国二百年のインド統治の根拠地となった大都会で、市街の目抜き通りは高層建築が櫛比し、道も広く電車・バスも通り街路樹も立派で、車馬の喧騒も第一級の近代都市の盛観である。人口四百六十万ですからね。

われわれを乗せて市内を見せてくれた運転手君は、工場とか橋梁とか多少近代的規模をもつ産業施設の附近を通りすると、いかにも自慢そうに徐行し説明してくれるけれど、日本人の一行を驚かすには少し無理で、驚いたような恰好をするのに骨が折れるといったあんばい。

発つ前に、日本航空からもらったインド旅行の案内書に二階建ての立派なバスが市内を走っていますが、あまり清潔とはいえませんのでおすすめできません。電車も同様です云々を、なんだか気の毒のような失礼のような案内があったが、マア衛生上の見地からくる懸念と思っていた。この街に立ってさてその電車バスを見ると、別にご注意がなくても乗るにはちよつとためらわれるもので、ナルホド、ナルホ

ドと合点するばかり。

しかし午餐ののち再び外出して、英領時代からの英国商館、英人街の方へ出かけ、立派な街路樹とレンガ作りの英国風建築の立ち並ぶ広い道路を走っていると、いままで並べたてたいろいろな見聞御託は全部うそのような立派さで、気どった馬車にでも乗って歩きたくなる。全く欧州風の広い広い都市風景で、やがて出てきたビクトリア広場周囲の対立するいくつかの総督や軍人の銅像、その正面にはインド国の皇帝でもあるとの象徴を示したビクトリア女王の記念宮殿の壮麗な建物。これもカルカッタ市の持つ大きな一面である。

高い高い椰子の木を周辺に置いて、かつては英国の威力を示す閩兵式などのあった広場の片隅で、毒蛇コブラがチャルメラに似た哀しい笛につれて踊る大道見世物、猿の芸当、何のジュースかわからない黄色い飲みものの手車の店、これはまた何とわびしい対照であろう。

執拗にすすめるこのいく組かの見世物屋に負けて、なにがしの銭をなげて蛇の踊りを見ていると、その見ているわれわれを遠巻きにインドの人たちが眺めている。その眺めているインド人の外側へインドの巡査が来て、あの見世物を見ている一団の人達は何だと訊いている。考えてみると、どうもこの王宮前一番の見世物はわれわれ日本人であるらしい。一絃の胡弓、哀しい笛を五、六十のいい年をしてポカーンと見とれ聴きほれている天竺の新興見世物となつているのに閉口して、吸いこまれるように車に入り、サツサとホテルを指して引揚げてしまった。

車の窓に次から次へと映つてゆく街頭の頭で物を運ぶ人、二階建てのバス、連結した市電、人力車、一列に並んで行く水牛。その中に見霊柩車のような大きなトラックがいく台も来る。行き違いの時によく見ると、土管とレンガを積んだトラックだが、四方のはめ板には全部極彩色で蓮花やライオン、象、あるいは仏伝の絵に似たものが描いてある。そして正面の運転台は額ぶちのようなものが上に付いた仏壇みたいで、瓔珞の垂れ下がったのさえ来る。全く例外なくトラックは美しい彩色がある。(つづく)